

▼オピニオン：インフラテクコンから広がる社会 互いに「気づく」コンテスト

木更津工業高等専門学校
環境都市工学科
青木 優介



何よりも、この大変な状況の中で、高専の学生たちに貴重な機会をご提供いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

本校からは、専攻科2年の男子学生3名によるチーム「NITKCs」、本科5年の女子学生4名によるチーム「c.Moai」の2チームが参加させていただきました。NITKCsの提案は、「木更津市における冠水情報通知システム」ということで、本校が所在する千葉県木更津市における道路冠水状況を同市が展開している情報伝達用のスマートフォンアプリで運転者に通知するとともに、その通知訓練などを通じて市民の防災意識の向上を図ろうとするアイデアでした。一方、c.Moaiの提案は、「街灯の色を利用した避難警告の周知」ということで、千葉県木更津市の金田地区を対象に、水害時の避難情報を街灯の色の变化で住民に周知しようとするアイデアでした。幸いにも両チームとも最終審査に進出でき、NITKCsには優秀賞ならびに企業賞（奥村組様、東日本旅客鉄道様）、c.Moaiには企業賞（東日本旅客鉄道株式会社様、古河電気工業様）を授与いただきました。



写真-1 優秀賞を受賞した
チーム NITECs のメンバー

担当教員として今回のコンテストを振り返りますと、学生たちは今回、「世の中は、思っていたよりも複雑」ということに気づけたのではないかと思います。様々にアイデアを検討したようですが、その度に「人」「費用」「管理と責任」の壁が立ちはだかることに、気づいたのではないかと思います。こういったことはアイデアをアイデアで留めるのではなく、実際の社会に実装しようとしてはじめて気づけることなのかもしれません。個人的には、学生たちがこういった気づきを経験することで、今後、自らのインプットを深化させ、アウトプットを実践的にすることを期待します。一方、こういった思念を過度に感じさせると、社会に対する委縮や諦めを生み出しかねないようなにも思います。このあたり、担当教員としてもバランスをとっていなければならぬと感じております。

なお、参加者の一人として他チームのアイデアも拝見させていただきました。本校のチームと同様にICT技術等を活用しつつ、地域の人々と協働するアイデアが多く提案されていました。なお、私の個人的な感覚では、インフラ整備といえばハード面の技術、そして、トップダウンが基本ではと。ただ、慢性化する人手不足、膨大な数の既設構造物・・・何より、インフラ整備の本来の姿とは地域の人々と協働して行うことでは・・・と考えたとき、学生たちの方が適正な考えを持っているのではと気づかされました。しかしそれでも、「人」「費用」「管理と責任」の壁が立ちはだかることは避けられません。今後も様々な状況を踏まえたうえで、最適解を見出せる人材の育成が望まれるのだと思います。その環境整備を担う一教員として、彼らの考えに触れる今回のような機会を大切にしなければならぬと思いました。

「インフラテクコンから広がる社会」。月並みですが、参加した学生も、その提案を受けた私たちも、それぞれに何か気づく。それはいずれ社会にとって本質的な効果をもたらすかもしれません。今後も、本コンテストのますますの発展を祈っております。